

1、問い：家文化をもたらずmedium

社会学者の山田昌弘は、1994年の著書で近代家族の特徴をこのように述べている。彼によると、近代家族の特徴は、

- ・「家族はお互いの一定の生活水準の確保、および労働力の再生産に責任を負う」という「経済的領域における自助原則」
- ・「家族はお互いの感情マネージの責任を負う」という「精神的領域における愛情原則」(山田1994:65-68)

「経済的な助け合い」「子育て」「愛情」：現在でも多くの人が「家族」に寄せる期待；「自助原則」「愛情原則」

・閉鎖性 DV／子ども虐待として表面化している家族の問題を生み出し、かつ、解決困難にしている

- ・コミュニケーションは「原則」に含まれない

communication: "the imparting or exchanging of information by speaking, writing, or other medium... -ORIGIN ... from LATIN *communicare* 'to share', from *communis*"(Oxford Dictionary of English, 2ed. Oxford University Press 2003)

but communicate what? share what?

in such situations as 「精神の学校」(中沢2004:43)、「ことばがたがいの人生をつなぎ、ことばが家庭の幅と深さを作ってゆく」(寿岳1988:236)、「ひとつの新聞で、全く正反対の言葉が載っていた」(日高2005:29)、「「教養」ではなく、生きるために切実な場所」(高橋2009:290)

家という場での、同人誌的雑誌・新聞をつくる文化の発生：

何がshareされていたのだろうか？家のまわりにはどのような社会があり、文化状況があり、何がmediumになってこうした文化を形成したのだろうか？

2、鶴見俊輔にとっての家：思想の原点あるいは制約

- ・鶴見俊輔にとっての「家族関係」：思想の原点あるいは制約¹

¹父親：「一番病」。知識人の「一番病」は日露戦争以降くらいから、学校制度で形成された。「一番病」は、つねに一番でいたいだけなのだから、集団転向というのは当然出てくる。さらに、「一番病」の人は、歴史の評価でも、はっきりした基準があると思っている。歴史の進歩があるとか、民本主義より社会主義が偉いとか、そういうものがね。そういう基準で、「これこれの点がこの人物の限界であった」とか言って、歴史上のできごとや人物を、今の立場から採点しちゃうんだよ。」(鶴見・上野・小熊 2004:20)

母の教えてくれたもの：「あなたを殺して私も死にます」と折檻する母親(同:28)「愛されることは辛いことだ」(同:24)「これで学んだのは、正義というのは迷惑だ、ということだ。全身全霊の人がいたら、はた迷惑だってことだよ。」(同:28)

「そうねえ。だからおふくろが私に何をくれたかっていうと、私の生き方の種をくれたの(笑)。私にとっての哲学のモデルは、自分の家族関係であり、私の親父やおふくろとの関係なんだ。これはもう、わたしの学問の根なんですよ。」(同:35)「これは私の思想や行動の、方法以前の方法にもつながるものなんだ。原点というか、制約といってもいい。」(同:15)

・他人をもっとも殺しやすい場で、たがいに助け合う：「男女の性交、生殖、血縁をいとぐちに」²

・現存の社会をこえる一つのかげ³

鶴見の関心：暴力ではなく、現存の社会をこえるかけとしての「家」のあり方
；「性交、生殖、血縁」は、「社会」から「助け合いの気分」をもらったり、逆に「社会」に新しい要素を還元する媒体にならない

・社会⇔medium⇔家

3、鶴見の書法

「革命について」『思想の科学』1963年4月

：日本から放逐されたある人物の半生と革命の発生条件

海軍病院時代：

「学問のことであろうとも、日本民族の歴史をけがすようなことはゆるさない」という「患者長」のビンタ

アメリカについての話を患者帳に依頼されて話す。「園家久元」の話。

・「じつは話したかった」のは⁴

子ども時代の昭和天皇への個人的愛情⁵→放校、家からの放逐、家による日本からの放逐
→アメリカでのサーカス、大道芸→アメリカの日本移民の拘留

² 「家庭とは、他人をもっとも殺しやすい場であることは、前にのべた。他人の家におしいって殺すよりは、おなじ家の中にいて殺すほうが、はるかにたやすい。殺人のもっともしやすい場であって殺さないという規約を護り、たがいにそだてる—そだてられるという間柄を長い間にわたって保ってゆくためには、原爆にうたれてにげまどう群衆の中でおとなと子どものあいだにめばえた助け合い、巡礼遍路のゆきかう道ばたの宿屋で生じた助け合い〔鶴見は井伏鱒二の小説『黒い雨』と『へんろう宿』を題材にしている〕よく似た気組みが、男女の性交、生殖、血縁をいとぐちにしてあらわれることが必要だ。助け合いの気組みが家の中に生じたあとでも、それが保たれるためには、家をとりまくもっと大きい隣近所、それよりもさらに大きい社会の中に助け合いの気分の回流があって、それが家の中にも流れ入ってくるようでないといふむずかしい。」（鶴見 1982:46）

³ 「社会が社会一般として次の世代をそだてることができないから、家という小さな場をとおして次の世代をそだてているというふうを考えられないこともない。そうすると家には、現存の社会をこえる一つのかげが、いつもあるわけだ。」（鶴見 1982:37-38）

⁴ 「じつはもっと話したいことがあった。それを話せばとりとめのない話ではなくなるのだった。園家久元は、なぜ少年の頃アメリカに渡って、サーカスで柔術芝居の悪役をつとめるようになったのか。その話を、私は、アメリカの捕りよ収容所で彼からきいた。」（鶴見 1991:457）

⁵ 「そこに新入り小学生の皇孫殿下がついて来て、ほしそうな顔をしてそばに立って見ている。久元が飴玉をあげると、殿下はよろこんでいた。久元は殿下を可愛らしいと思った。駄菓子のようなものでも自由にたべられないこの少年に対して、自分が後援者になっているように感じた。ところがそのあとがいけなかった。宮中に帰ると、このお菓子をもっとたべたいといわれたとかで、この駄菓子を与えたのは誰だ、という詮議がはじまり、皇孫のパトロンのつもりだった久元は、罰せられることになった。」（鶴見 1991:458）

「私にとって自分の分身」⁶

→帰国→天皇の名による拷問

「（日本で）園家夫妻は、しばらく前に憲兵隊に引かれて行って、いためつけられた。この戦時中に、夫婦が仲よく揃って出歩くのが第一いけない、というのだった。それに、話をしているうちに、アメリカがこの戦争に勝つだろうと思うと久元がいったことが、憲兵隊をおこらせたのだった。彼がかつて愛して大いに後援したつもりだった皇孫殿下は、この時天皇になっていた。その天皇を人間として愛し、この時も愛していた園家久元は、その天皇の名前でごうもんを受けたのだった。彼が気落ちしていたのも無理はない。」(鶴見1991:462)

・ひとつのパンにふたりの人間⁷

園家という人物は、どうして鶴見のはらの中に刺さっているのか。

どうして「革命について」という文章の最初に、これだけのことを書いたのか。

＊

敗戦後十八年、総合雑誌がほとんど革命について語らなくなった：不健全革命への決意ぬきに民主主義は成立しない⁸

「安保の時から三年たって革命についての証言をもとめられた時、自分の底から取り出すことのできたのは、戦争中に会った園家久元の肖像である。」(鶴見1991:466)

・「自然人としてのエネルギー」

・「私生活の充実」「天下国家の問題を論じることを好まない」

しかし「私生活に天下国家が干渉してくる時、天下国家を論じることをこぼさない」⁹

⁶ 「久元は、私にとって自分の分身であると感じられた。おなじように小学校の時に身を持ちくずし、私もアメリカにやって来た。それからは、賽の河原に石を積むように、朝早く起きるということから、一セントでもよけいな出費は避けるという小さな行為を自分に新しく教えこもうとして、小心な暮らしかたになっていた。その自分にとって、自分とまったくちがうのびのびした生きかたをしている園家久元は、あるべき自分の姿を教えた。」(鶴見 1991:461)

⁷ 「園家からききたいくつもの話の中で私の記憶に残っているのは、もうひとつ、つぎの話だ。

「ここにパンが一個あるとする。山の中で食物がなくなって、あなたと僕とだけ残ってる。二人で食べれば食物はなくなってしまって、助かるところまで歩いてゆけない。その時、君はどうする。それだけが人間の問題だと思うんだ」

園家は、こういう単純な問題としてしか人生を理解しなかった。こういう問題が起った時に、自分はもう年寄りだし、君のほうが若いし未来があるのだから、君にやる、ということが出来る場合にだけ善がある、と彼は考えるのだ。」(鶴見 1991:462)

⁸ 「今日、革命を抜きにして民主主義を説く道につくことは危険だと思う。革命への決意のないところに民主主義は成立しない。これこれの条件まで自分たちの生活が国家によって引き上げられたならば、自分たちは政府と関係のない私人であっても結束して、政府を倒そう。そういう約束が国民の中に共通の理解事項としてある時にのみ、民主主義は成立する。」(鶴見 1991:463)

⁹ 戦前の園家にあった自然人としてのエネルギーは、戦後の制度の下ではそのほとんどが生きやすくなっている。園家が皇孫殿下に対して示した人間から人間への親しみの表明は、戦後に改革された(はずの)天皇制においてはむしろ模範的な態度だろう。「文芸春秋」や「女性自身」の天皇家に対する扱いは、園家精神に沿っている。ふたたび天皇を神格化することなしにこの方向を維持することができるかどうか、日本の革命の問題がかかっていると私には思える。

園家は、戦争が終ってから生れた日本の少年少女たちによく似ている。徹底的な意味での戦後派である。彼の欲望はすべてきわめて自然なものであり、興味は私生活の充実に向けられる。天下国

- ・「見えにくい一部分としてとけこんで存在しつづけるような革命の志」への「期待」¹⁰
→
 - ・この文章が実際に表しているのは、鶴見の「期待」
 - ・「欲望の自然さ」からくる「私生活の充実」と「革命の志」がとけこむ「私生活の充実」は直接的にはつながらない
 - ・そもそも鶴見にとって園家という人物が重要な理由は、「きわめて自然」な「欲望」を発露し、「私生活を充実」させたからなのか？

園家：確かに彼は「天下国家を論じない」が、論じる【場】から追放された。
家からも国家からも追放された人間が、社会への復讐や破壊ではなく生きる生き方と、革命の関係。
つながらないものがつながるためには、mediumを考える必要

・ 参考文献

- 寿岳文章・寿岳晶子(1988)『父と娘の歳月』人文書院
高橋在也(2009)「戦時下知識人家庭の「家内文化」——思想がうまれるとき」『唯物論研究年誌』唯物論研究協会
鶴見俊輔(1982)『家の中の広場』編集工房ノア
一(1991)『鶴見俊輔集1 アメリカ哲学』筑摩書房
鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二(2004)『戦争が遺したもの 鶴見俊輔に戦後世代が聞く』新曜社
中沢新一(2004)『ぼくの叔父さん網野善彦』集英社新書
日高六郎(2005)『戦争のなかで考えたこと ある家族の物語』筑摩書房
山田昌弘(1994)『近代家族のゆくえ』新曜社

家の問題を論じることを好まない。しかし、自分の私生活に天下国家が干渉してくる時、天下国家を論じることをこぼさない。こういう政治への接近方法は、戦前の日本人には少なかったものだが、こうした政治への接近方法と革命への道を断ち切らないで維持することの中にしか、日本における革命の可能性はないと思う。」(鶴見 1991:466)

¹⁰ 「天下国家を論じる左翼評論家的な意味での政治への接近ではなく、自分の私生活の形、自分の家庭生活の形の中に、見えにくい一部分としてとけこんで存在しつづけるような革命の志が、今日の戦後世代の中に存在しているし、それに期待をかける。」(鶴見 1991:467)